

## 教師を育てた 言葉たち

No. 013

大分県立竹田高校

田所 伸先生

たどころ・しん

◎教職歴16年。同校に赴任して2年目。進路指導副主任。地理歴史科担当。前任校在籍時に立ち上げた「Oita Education Seminar」は、現在も存続。学校の違いを超えて教師が自主的に集い、学び合うスタイルは、その後、長崎県など全国に広がった。



**10** 年間勤務した前任校は、県下有数の進学校でした。そのため、同僚や生徒との会話は成績に関連した話題が多く、それはとても大切なことだと分かった上で、生徒が将来を見据えて、自身をもっと高め押し上げたいような働きかけをしたいと考えるようになりました。「景気が悪い」「先が見えない」と大人から言われながら育ってきた生徒が、「自分は、こんなふうには人生を生き抜くぞ!」と、希望を持って目指す将来像を描けるようにしてあげたいと思ったのです。しかし、教師としても、社会人としても、まだまだ経験の浅い私には、生徒に明確に示せる言葉はすぐには見つかりませんでした。

生徒が生きる未来はどんな社会で、どんな力が求められるのか。私はいろいろな本を読み、校内外の様々な人に話を聞きました。地元有力企業の人事部長に面会を申し込んだこともあります。そんな中、経済産業省が主催した有識者会議から、これからの社会で求められる資質・能力として定義された社会人基礎力が示されました。その中には、主体性、働きかけ力、実行力といった要素から成る「アクション」という資質・能力がありました。これこそが、自校の生徒に私が示すべきものだと感じました。

**生** 徒たちは優秀であるため、仲間や教師の考えを察知し、スマートにリアクションすることができます。半面、自らアクションを起こそうとすることは少ないため、壁にぶち当たる機会は多くはありませんでした。しかし、失敗経験は改善や成長につながる貴重な機会として必要です。そこで私

は、「Action」という言葉をいろいろな場面で発し、生徒に前に踏み出すことを求めました。感動的な「Action」はクラスを超えてたえようと、トロフィーも作りました。生徒たちはホームルームや学校行事で自ら目標を掲げ、高校生活をよりよいものにするために新しい企画を立て始めました。時には、それまでの学校の常識を打ち破るような提案も出されましたが、「Action」を促した責任を果たすため、生徒とともに管理職のもとに説明に行きました。そして、提案が実現できなかった時は1人の仲間として生徒に自分の力不足をわび、一緒に悔し涙を流しました。

「Action」は生徒だけでなく、自分自身にも求めました。県内の若手教師に呼びかけ、経験や悩みを語り合う勉強会を立ち上げたのもその1つです。勉強会は今も続き、1人で頑張っている人、モヤモヤを抱えている人がいると聞けば、私から電話をして「一緒に頑張ろう」と声をかけています。そうした自分の「Action」は、失敗も含めてできるだけ生徒に話してきました。未来は確かに予測できませんが、分からないからといって立ち止まって待つわけにはいきません。分からなくても一歩踏み出している自分の姿を、人生の後輩である生徒に見せたいからです。

**3** 学年主任として生徒を送り出した年、私は前任校を離れました。離任式の日、卒業式を終えた3年生全員から、「最高のActionはあなただ」というメッセージとともにトロフィーが返ってきました。「Action」という言葉が言霊ことだまを宿して私と生徒に染みついたのだと、この上ない喜びを感じました。

大分県立竹田高校 全日制/普通科/共学/1学年約160人/2018年度入試合格実績(現役のみ):国公立大は、岡山大、広島大、長崎大、熊本大、大分大などに43人が合格。私立大は、神奈川大、近畿大、西南学院大、立命館アジア太平洋大などに延べ71人が合格。

※プロフィールは、2019年3月時点のものです。